

浄

monthly
JŌDO

土

10

October 2005



法然上人鑽仰会



平成16年1月号



平成16年2、3合併号



平成16年4月号



平成16年5月号



平成16年6月号



平成16年7、8合併号



平成16年9月号



平成16年10月号



平成16年11月号



平成16年12月号

浄土

2005/10月号 目次

法然上人を語る①	ひろさちや	2
法然上人そして聖女テレーズのこと	石丸晶子	12
表紙のことば	村上 健	23
会いたい人 池部良さん②	関 容子	24
仏教コラム	大室了皓	32
響流十方	小村正孝	34
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	38
シネマ随想	袖山榮真	40
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会主催公開講演会より（平成十七年六月二十一日・大本山増上寺慈雲閣）

法然上人を語る

第1回

大正大学客員教授
宗教思想家

ひろむちち



〒100-0001 東京都千代田区千代田 法然上人記念館
〒100-0001 東京都千代田区千代田 法然上人記念館
〒100-0001 東京都千代田区千代田 法然上人記念館

仏教伝来と平安仏教

法然上人が日本の仏教の歴史においてどのような位置にあるのか、どのような役割を果たされたのかということを、最初に検討してみたいと思います。

日本に仏教が伝わってきたのは六世紀半ばです。百済の聖明王がわが国に仏像や経典を送り込んできて、今東アジアでは仏教が流行していますよ。「おたくの国もひとつこの仏教を信仰したらどうですか」とそういう形で送ってきたわけなんです。ですから、一番最初の仏教は国家対国家の関係で、天皇家に伝わってきたのであって、庶民はまったく仏教に関係していなかったわけです。

これは珍しいケースなんです。陸続きの国でありますと、普通は信仰している人が入ってきて、徐々に広まっていくわけです。中国に仏教が伝わったときは、仏教徒が中国大陸に入ってきて仏教の信仰を始める。それがどんどん周りに影響していく。しかし、日本は島国ですから、中国ないしは朝鮮半島からおたくのほうもひとつ仏教を勉強したらどうですか、やってみたらどうですかという形で伝わってきた。そういう意味で、日本の仏教は国家仏教であります。それから輸入仏教でありました。この二つの点が非常に大事なことだと思います。

こういう時代がずっと続くわけでありまして。奈良時代においては国家仏教であり輸入仏教であります。ですから、経典のほうは中国の方からどんどん送り込まれてくるわけです。向こうにあるものがどんどん日本に伝わってきて、日本ではそれを勉強するという輸入仏

教でありました。

それから、国家仏教というのは、お坊さんは国家公務員でありました。国家が金を出して、お坊さんを養成していく。そして、お坊さんは民衆に教えを説いてはいけなかったのです。養老律令の中に僧尼令というものがあります。お坊さんの取り締まり規則です。その中で、お坊さんは俗人に接触してはいけないという決まりがあります。皆さん不思議に思われるでしょうが、これが日本に伝わってきた当初の仏教だったのです。

では、お坊さんは何をやるかといったら、一生懸命修行をやって、そしてカリスマ的な力を身につけて、国家の安泰を祈る。天皇家、国家の安泰を祈るのがお坊さんの役割なのです。

そういうお坊さんが俗人に接触すると汚れてしまうじゃないか。そういうカリスマ的な力がなくなるということで、一般人と接触を禁じられてきた。それが日本の仏教でありました。だから、最初期の仏教は国家のための仏教なんです。それから、輸入品だということ、この二点をきちんと押さえておいてください。

それに対して、ようやく反発が出てくるわけがあります。その最初に出てきたのが最澄という人です。伝教大師最澄です。天台宗を開いた最澄ですが、この最澄というお坊さんは、輸入仏教であるということはおかしい。仏教の経典にはいろいろな経典がある。道徳的な教えを説いているものもあれば、お釈迦さんが神通無碍の超能力を発揮して活躍されるようなお経もある。

大乘仏教と小乗仏教。こういうふうに仏教の中にどうも二種類あるんじゃないか。この

大乘仏教と小乗仏教は無批判に入ってきているが、日本人にとって本当に必要な仏教は一体どっちなのかという疑問を起したわけなのです。

仏教、仏教と言うけれども、仏教の中に大乘仏教と小乗仏教があるじゃないか。最澄が出した結論は、もう小乗仏教は要らないんだ。日本の仏教は大乘仏教であるべきなんだと考えたわけです。これは日本人の独自の選択なんです。

今までは向こうのほうから送り込まれたものを受け入れていただけだったのを、どういうものがほしいのか。日本人にとって何が本当に必要なのかというのを、日本人の独自の目で判断しようとした。これが最澄が最初にやった仕事なんです。

小乗仏教と大乘仏教はどう違うかといえば、小乗仏教はごく少数の精鋭、エリートだけが救いにあずかることができるんだという主張なんです。ごく少数のエリートって誰だといったら、出家したお坊さんです。だから、在家の人間は駄目だというのが小乗仏教の主張なんです。ですから、出家しなさい。そして、出家した者のみに本当の救いが与えられるんだというのが小乗仏教の主張なんです。

したがって、大乘仏教は彼らにとっては非常に軽蔑の対象であつたわけなんです。何を言っているんだ。大衆？ あんなうさん臭い有象無象がそう簡単に救われるものかという主張だったわけです。

それに対して最澄は、いや、そうじゃないんだ。この小乗仏教は日本人には合わない。私たちにとって真に大事なのは在家の人間の救いなんだということです。そういう主張を込めて選択したんです。これが最澄のやった仕事なんです。

だから、私たちにとって大事なものは出家して、人里離れて修行をやって、おのれ一人が救われる、そんな仏教はだめじゃないか。みんな大勢の人が一緒に安楽にならないといけないという、それが大乘仏教の主張だし、本来宗教はそういうものなんだということを最澄は言っているわけです。

そしてもう一人いるんです。それは誰かと言ったら、この最澄といつも並んで称される弘法大師空海です。この空海というお坊さんは最澄と同年代の人です。空海のほうが七歳ぐらい年下なのですが、二人は同じ遣唐使船に乗っています。遣唐使船団ですから、四隻出るんで、乗った船は違いますが、同じ遣唐使船団に乗って二人がともに中国に渡ったわけです。

その弘法大師空海もやっぱり仏教を選択しました。この空海の実験の基準は何かと言ったら、仏教には顕教と密教がある。顕教よりも密教のほうがすばらしい仏教なんだ。だから、顕教を捨てて密教を学ばないといけないという形で仏教を選択したわけです。これが弘法大師空海のやった仕事であります。

それでは、顕教と密教はどう違うんだといいますと、顕というのは明らかにしているという意味です。お釈迦さんが肉声で、人間の言葉でもって説かれた教えが顕教なんです。だから、歴史的に過去に存在されたお釈迦さんが私たちにちゃんと教えを説いてくださった。もちろん、サンスクリット語でお釈迦さんは説かれた。もっと詳しく言うくと、サンスクリット語ではなかった。アルダマーガーデー語といって、マガダ地方の方言をしゃべっておられたと学者は考証しておりますが、一般にはサンスクリット語で通じます。

だから、お釈迦さんがサンスクリット語でお説きになった教えを翻訳して私たちは勉強することが出来る。ちゃんと文字で読むことが出来るのが顕教なんです。

それに対して、密教というのは何かと言ったら、お釈迦さんじゃないんです。宇宙の仏様。もう宇宙そのものが仏だと理解するわけです。ですから、姿形のない仏様です。本来仏というのはそういうものじゃないか。そういう宇宙の仏様は、その教えを人間の言葉によらずに、言語によらずに説いているわけなんです。これは難しいです。いわく言い難いという。宇宙の言葉だから。

では、宇宙の言葉ってどんな言葉かといったら、それはだれにもわからないわけです。全く地球上にない言葉です。言葉にならない言葉、「超言語」と言えはいいいんでしょうか。そういうものです。

では、どうしたらそういうものがわかるのかといえ、それは一生懸命自分の感性を研ぎ澄ませば聞こえるようになってくるわけです。どう言えはいいいのか、ここは難しいところですが、例えば、空海は「星に聞け、空に聞け、波に聞け」と言っている。私たちは風が吹いていると、やかましいねとか、いい風だねとかいう音を聞くわけですが、そういう音の中にも仏様の説法がある。いや、考えてみれば、一輪の花が咲いてしおれていく。その変化の中に何か仏の語りかけがあるんです。

私たちはそれを単にしおれただけという自然の現象と見ますが、研ぎすまされた感性で見るとそれが読めるのです。そういう形で秘密に仏教を勉強する。いわゆる宇宙の仏の声を直に聞こうというものです。

空海は密教のほうがすばらしい仏教なので、その密教をこれから学ばないといけないということと選択をしたわけです。この場合に、さっき最澄は大乗と小乗を選択した、空海は顕教と密教とどっちがいいかを選択した。そして、密教のほうが優れているんだ。伝教大師最澄のほうは大乗仏教のほうが優れているんだといって選択したんです。

二人の選択の基準がちよつとずれています。だから、二人とも考えが違う、別のジャンルで選択していますから、必ずしも一つにならないわけです。だから、空海に言わせれば、顕教の中に大乗仏教と小乗仏教があるんだと見ているわけです。最澄のほうは、小乗仏教と大乗仏教があつて、大乗仏教の中に顕教と密教があるんだと見ているわけで、ちよつと選択の基準が違うわけです。

いずれにしても、平安時代の仏教というのは何かと言えば、この選択することなんです。今まではアトランダムに經典が中国の方から送り込まれてきた。それを単に受け入れるよりはなかったものを、日本人の目で仏教を選択しようじゃないかという動きがあつたのが平安時代になってからです。

法然上人の選択

そこで私たちの法然上人なんです。法然上人というのはいつの時代の人かというと、一一三三年から一二二二年に生きた人です。ちよつと六十歳になった年に鎌倉時代になるわけ、法然上人は私は平安時代の人だと見ています。

そうしますと、今申し上げましたように、最澄と空海の二人が平安時代の仏教者で、二

人とも仏教を選択したんです。そして同じことを法然上人がなされたんです。やっぱり法然上人のお仕事は何かと言えば、仏教を選択することだったと思っていただきたい。そこに法然上人の大きな役割がある。そして、私たちが法然上人を讃仰するときにはそこに重点を置かなければいけないと思うのです。

そうすると、法然上人はどのような選択をされたかといいますと、法然上人は仏教には聖道門と浄土門があると分類された。聖道門が難行の仏教、難しい修行をしないといけない仏教です。浄土門は易行。易しい行で救われるんだという仏教です。そして、聖道門の仏教よりも浄土門の仏教を選ばれたのが法然上人です。

そうすると、伝教大師最澄は大乗と小乗で大乗を選び、弘法大師空海は顕教と密教で密教を選んだ。法然上人は聖道門と浄土門の中で浄土門を選ばれたんだということです。これが法然上人のなされた仕事であり、そして、私が日本の仏教の歴史において、いや、インド以来の仏教の歴史において、こういう選択をしたのは法然上人が最初の人でありました。私はそこに誇りを感じていいだろうと思うわけであります。

実は法然上人の選択は一体どういう選択をなされたのかといいますと、弘法大師や伝教大師はどっちの仏教が優れているかという価値判断をしたんです。それに対して、法然上人はそういう価値判断じゃなかったのです。どっちがすぐれているか。そんなことはほとんど問う必要はないことだ。ただ、私たちにあって、私たちがというのは在家の人間を中心に考えてほしいんですが、私たちにとってはやはり仏教は浄土門でなければおかしいんじゃないかという形を選択されたわけです。

私はこれを「メーカーの論理からユーザーの論理へ」と言っております。メーカーとユーザーというのはおわかりになりますね。メーカーはつくる方です。つくる方はつくる方の論理を持っているわけです。しかし、消費者の方は消費者の判断があります。

法然上人はその点をつかれたんです。なるほど、聖道門の仏教。仮に禅宗だと思ってください。禅宗はすばらしい仏教です。しかし、私たち忙しい人間に坐禅をやれますか。坐禅をやったら悟りを開けるかもしれないし、だんだん人間が向上、人格が向上していくかもしれない。そういうふうに「坐禅をやれば悟りが開けるよ」と言われても、それはメーカーの方の論理なんです。

なるほど、それは立派な仏教ですばらしいですが、私たちにそんなことをやっている暇はありません。日常生活が忙しくてという人間に、坐禅なんかできっこありません。何にも私たちはできない。それじゃ、その人間は救われないのか。これは小乗仏教だったら救いはない。お前は駄目なんだと言うわけです。

ですから、小乗仏教の方ではどう教えているかといったら、お前さん方は駄目なんだから、来世は出家できる身分に生まれ変わらなさい。生まれ変わるためにはちゃんとお坊さんに布施しないといけないよ。布施をする、功德を積んだら、来世は出家できる身分に生まれ変わるからね。ですから、そのときに救いを与えられる。そんな形で教えを説くわけです。

それは困る。そうじゃない。ユーザーの論理、私たちは何にもやらないで、仏教の実践だとか、修行だとか、そんなもの何もやらないで、私たちが救われる方法がないのか。そ

ういう角度から言うのがユーザーの論理なんです。そういう論理でもって仏教を選択され
たんです。これが法然上人のなされた仕事だと思っただきたい。私はそう考えている
んです。学者は反対するかもしれませんが、私はそうなんです。

だから、お前さん方、何にもやらんでもいいよ。南無阿弥陀仏のお念仏を称えなさい。
そうしたら、もう救われるんだから、大丈夫、大丈夫ということです。ただ、南無阿弥陀
仏をお称えしなさい。そうしたら、全部救ってくださるんです。法然上人は阿弥陀仏にお
任せしておきなさいという形の仏教を選択されたんです。

すごい仕事をなされた。何もしない。ただ、南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏というのは、
「仏様、お任せします。阿弥陀さん、頼みますよ」という言葉ですね。「頼みますよ」と言
っておけば、それで全部引き受けてくださるという形の仏教を選択されたんだと私は考え
ているわけです。

(つづく)

法然上人

そして

聖女テレーズ

のこと

諸宗教間の対話を願って

東京経済大学教授

石丸晶子

一

一一九八年（建久九）の主著『選択本願念仏集』の中で、法然上人はご自身が回心し、発見された浄土へのもつとも確実な道として、仏教を聖道門と浄土門に大別され、難行苦行の聖道門に対して、浄土門こそ、万人を往生可能なものにする易行門であることを明らかにされた。

ここに仏教は一八〇度の転換を遂げ、万人浄土往生の道が開かれたのである。

今、『浄土』の読者ならば、誰もが知っているに違いない法然さまのあのお言葉を思い出してみよう。

「もし、阿弥陀仏が造寺造仏をもって功德とし、往生への要件とされたならば、貧しい者たちは往生への希望を失うであろう。

しかし世の中を見つみるに、富貴の者は少なく、貧者は甚だ多い……」

ここで、さらに世の人々の姿を御覧になつ

た法然さまは、智慧のある者、学識のある者、厳格な戒律を守ることの出来る意思堅固な者、等々が仏の国へ往生する必須条件とされているにも関わらず、それらを兼ね具えた者が甚だ少ないことを見出され、

「すると、仏の国の往生はほとんどの人間のなしえぬ夢なのか。一切衆生救済の仏の慈悲とは何なのか」と深く苦悩された。

この疑問は解決出来ぬまま二十五年の長きにわたって続き、後の述懐によると、法然さまは寢食もままならぬほど、真理を求めて苦悩を重ねられたという。

そしてよく知られているように、この二十五年の長い闇夜のあと、電光石火、法然さまは弥陀の第十八本願に開眼され、ここに難行苦行の道であった日本仏教の往生への道は、念仏易行の万人救済の道へと、開かれていたのである。

二

私がここで思い出すのは、キリスト教カトリックが辿って来た長い道のりだ。

実は私は第二次世界大戦の敗戦直後から教会に通い始め、一九四七年の夏、洗礼を受けたカトリック信徒である。初めは大阪市内の教会に、その後、遠藤周作がさまざまな作品で取り上げている、夏になると夾竹桃きょうちくとうの赤い花がいつせいに咲く阪神間の教会に、所属してミサに通った。

ところで、その頃のカトリック教会が信徒に奨励した信仰者としての生活というものは、仏教でいえば、丁度、難行苦行の道を歩き通さねば仏の国の門は開かれない、と云うものに等しかったと思う。

私が所属していた大阪や神戸地区で、明治時代、宣教活動を始めたのは、パリに本部を置く宣教会であった。そして当時、十九世紀から二十世紀にかけての特にフランスのカト

リックは、神の愛と救いへの恵みよりも、罪のおそろしさとこれに対する正義の神の怒りと罰、そして地獄の永遠の刑罰を強調するジャンセニズムの影響を、なお脱していなかったのである。

ジャンセニズムというのは十七世紀オランダの神学者ジャンセニウスによって提唱されたカトリックの教義理解で、その後、パリのポール・ロワイヤルの修道院を中心にしてフランスの国論を二分するほどの勢いをみせて広がった。『瞑想録（パンセ）』の著者として名高いあのブレーズ・パスカルも、同時代人としてジャンセニズムの影響を深く受けていたといわれている。

十九世紀、二十世紀になってもフランスを中心にカトリック教会では、なおその影響を強く引きずっている地方や修道院、司祭信徒が多かった。

そして私も、そんな空気の中でカトリック信徒になったのである。

そこでとりわけ強調されたのは「肉欲」「性欲」の大罪であった。

結婚しても夫婦の交わりを持たず、兄妹として暮らすことを、私が所属する協会の日本人司祭はくりかえし説教壇から勧告した。「性行為をしているとき、人は人間であることを止め、動物になっている。これ以上の大罪はない。人間をご自分の姿に似せて創られた神に対する大きな侮辱だ」と彼はしばしばいい、その都度顔を歪めた。夫婦の交わりは子どもをつくる目的でなされるときのみ、容認される、といわれていた。

私が母や弟とともに洗礼を受け、指導して頂いたその日本人司祭は、ご両親が伝道士・伝道婦として教会の中の家に住み、小学校から小神学校に入り、日本の一般社会のことはほとんどご存じないばかりか、知ろうともなさらない方であった。ひたすら、中世フランスに花咲いた高い尖塔を持つゴシック建築の大聖堂や、そこを飾るステンドグラスに憧れ

ておられた。

遠藤周作の短編小説の一つに、遠藤その人とおぼしい主人公とともに戦後まもなくフランスに留学した青年が、起こってくる性欲を鎮めるために、リヨンの町を早朝からマラソンをして駆け回る話が出てくる。私の指導司祭も自決は不自然な肉欲の処理で、人の目にはつかなくても神の目は逃れられず、「大罪中の大罪」だと厳しく断罪するのが常であった。

又その頃、一般信徒にあっても、自分の体を鞭打ったり、下着に釘を縫い付けて体を痛めることなどの苦行が奨励されていたが、こうした苦行も、年頃になれば自然現象として起こってくる「性欲」を鎮めるために、考えだされたものであったろう。

そういえば、もうその頃すでにサルトルは、『存在と無』のなかでこう言っていたのに。

人間は「世界の中に他の人間たちと結びついて存在している存在としてのかぎりにおい

て、根源的に、かつ根本的に、一つの性的存在」である、と。またメルロ・ポンティも『知覚現象学』の中で、性は単に生理学的次元のものではなく、自由としての人間に関係するメタフィジックな意味を持っている、と言っていたのに。

もっとも当時、これらの書は、信徒にとつて読んではいけない禁書であつたと思う。

書き出せば切りがないが、学校でも家庭でも、コミュニケーションを大事にするのではなくて、沈黙を守ることがしきりに称賛され、食卓に美味しいご馳走が並んでも、なるべく美味しくない食事のことを考えて、おいしい食事を不味くして食べる、それがその人の「徳」とされた。私は上京して大学に入ったとき、日常生活を楽しいものにする会話の言葉が出てこない、一種の失語症に私はなっていることを発見した。

その地域や指導司祭によって、多少の違いはあつたであろう。だが、大体、こうした空

気が一九六〇年第二バチカン公会議が始まる以前、カトリック世界、特にジャンセニズムから抜け出せないでいるフランスの一部保守的なカトリックを覆っていた、支配的空氣であつたと思う。その頃、まだ子どもであつた私は、司祭が説教壇から大声で警告し、教理研究会で繰り返し放つ言葉の意味をよくは理解出来なかつたが、それらの言葉から結論として言われる「大罪」とか「地獄での永遠の刑罰」ということには、心が恐怖で震えた。今から思えば不思議なことに、その頃、信徒が学び、教えられるのは、ジャンセニズムを色濃く引きずつたカトリックの「教理」であつて、『聖書』ではなかつた。

『聖書』は殆んど読まれなかつた。苦行そのものが自己目的化し、神その方のお姿は、どこかに吹っ飛んでいる場合が少なくなかつたように思う。

三

ところで、カトリック信仰世界の大転換であつた第二バチカン公会議の方向性に、影響を与えた一人の聖女がいる。

それは、リジューの聖女テレーズ（ラテン読みではテレジア）といわれる聖女で、私見を記せば、難行苦行の聖道門の狭き道であつた旧仏教から、万人救済の開かれた浄土門に開眼された法然さまにも比すべき神の愛と救済の道を、法然さまに遅れること七百年にして見出した聖女であつた。

彼女はフランスのレース製作の名産地アラソンソンに信仰篤い両親の末子として一八七三年に生まれ、四歳で母を亡くしたあと、父と四人の姉たちと共に北フランスのリジューに移つた。そして姉たちに続いて十五歳で戒律きわめて厳しいカルメル会という修道院に入り、一八九七年、二十四歳で肺結核のため、短い生涯を終えた女性である。従つて、受け

た学校教育といえは中学一、二年生のものでしかなかった。

しかしこのテレーズが、神の靈に照らされ、世界の名だたる神学者、学者、智者が集まつて討議される第二バチカン公会議の、基礎となる信仰の道を切り開く力強い一人となつたのである。

テレーズは死の前、修道院長の命令で自分が生きてきた思い出を記した『自叙伝（主が小さな花にしてくださいと恵みの思い出）』を書いた。それがテレーズの死後出版され、世界的な旋風を巻き起こしたのである。日本でも明治の中期にはフランス人宣教師によつて翻訳され、宮沢賢治も愛読者であつた。

『自叙伝』の中でテレーズはいう。私は幼い時から聖人になりたいという希望を持っていました。けれども、聖人たちと私自身とを比べると、そこには雲間に頂きを隠す高い山と、通行人の足下に踏みしだかれるつまらない砂の一粒ほどの違いがあることを、認めないわ

けにはいきませんでした。

しかし、神様は実現不可能な望みを私に起こさせになる筈はありません。そこで失望せずに聖書を読んでいきますと、

「ごく小さい者は私に来るように」(箴言)

「低い人々には、慈しみのゆるしがある」(智恵の書)

と神様は仰せられ、それでもなお十分ではないかのように、「母親がその子を愛撫するうちに、私もあなた達を慰め、胸に抱き、膝の上のせて愛撫しよう」(イザヤ)と叫んでおられることに気付いたのです。

あらゆる人の中でもいちばん小さくて弱い私は、大きくなる必要がなかったのです。それどころか、私は大きくなって神様のお腕から離されなくなかったので、ますます小さな者にならなければならなかったのです。

今は発明の時代で、階段を一段ずつ上らなくても、エレベーターがあります。自力で険しい階段を上るには、私は余りに小さいから、

階段ではなくて、真っ直ぐに、とても早く行けるエレベーターを見つけない。

そして聖書によれば、そのエレベーターに乗せて私を神様のところまで運んでくださるのは、至って小さな者に約束された神様ご自身のお腕なのでした……。

テレーズはこうして、罪と罰を下す「怒れる神」ではなくて、「愛と慈しみに満ちた神」を発見し、その御腕なるエレベーターに身を委ねて、「通行人の足下に踏みしだかれるつまらない砂の一粒」から、「雲間に頂きを隠す高い山」の頂きへと至りついたのである。

彼女の死後、テレーズ旋風とも呼ばれるものが世界中に起こり、その取次ぎによって多くの奇蹟が起こった。そしてテレーズは、異例の速さで一九二五年に列聖され、現在、二十世紀最大の聖女として世界中の人々から慕われている。

修道院長は或る日、テレーズに言ったという。「神の霊はあなたを照らして、数十年修

道生活を送った修道女にも勝る智慧と経験をお与えになった」と。事実、今、仲間の修道女によって書きとめられたテレーズ晩年の記録を読むと、そこには、とても二十四歳の女性の言葉とは思えない、神の霊に包まれた人の深い英知が輝いている。

死に近く、病苦に喘いでいるテレーズを慰めて看護の修道女は言った。「あなたは間もなく天国の福楽にお入りになるでしょう」

テレーズは答えて言う。「私を惹きつけるものは天国の福楽ではありません」「では何ですか」と看護修道女。

テレーズは答えた。「それは愛です。愛そのものである神さまを、人々に知らせるために、地上に戻って来ることです。私は、地上に善を行いながら、私の天国を過ごしたい。神さまもそれをお許しくださるでしょう」

四

テレーズが発見した「神の愛に信頼して、

それに全く身を委ねて生きる小さな道」というのは、法然さまが至りつかれ、私たちに残していかれた道に、そのまま通うのではないだろうか。

法然さまは愛の神の御腕であるエレベーターといわず、「本願他力の翼に乗って」と言われ、ご遺言である「一枚起請文」ではくつかえし、たとえいかに深く学問を究めていようとも、決して誇らず、愚者の自覚をもって、ただひたすら弥陀の本願に依り頼み、専心念仏すべし、と述べておられるが、言葉は違っても、信仰者として至りついたところは同じなのではなからうか。

よくよく省みてみれば、人間誰しも愚者たらぬ者はなく、弥陀がいます浄土に、神がいます天国に、至りつくすには、本願他力の翼に乗せられ、神の御腕たるエレベーターに乗らずしては、行けないのだ。

法然さまとはほ同時代人としては、カトリック世界にアシジの聖フランシスコがいる。

法然さまの時代、日本は古代の貴族社会が崩壊し、中世武士社会が誕生するという激動のさなかにあった。世の乱れ、庶民の苦しみには言語に尽くせぬものがあったという。

一方、フランシスコが生きた十二、三世紀のイタリアにおいては、教会内部の退廃には目を覆うものがあったと伝えられている。そこにフランシスコが現われ、イエスに立ち返り、イエスに従った生活呼びかけ、実現したのであったけれども、これによってその後のカトリック世界全体が、一新されるのはまだ遠い先のことであった。

異端審問、魔女裁判、ジャンセニズムその他、さまざまな歴史を紡いで、カトリック世界は四十数年前、ようやく第二バチカン公会議に至りついた。そしてこれによって、法然さまのみ教えとカトリック教会とは、その教えと心と目指すものにおいて、遣う言葉は違っても、大きく近寄ってきたと思う。

五

終わりに、私は最近の忘れがたい経験について記しておきたい。

この七月、知恩院の雪香殿を会場として「囲む会」という集いがあり、今回は法然上人のお手紙やご臨終について学ぶということで、私もお招きを受け、参加させて頂いた。「囲む会」というのは梯實圓師を囲む会で、浄土真宗の方々の研究会であった。

研究会の翌日は清涼寺や二尊院その他、京都市内の法然さまゆかりの寺々を巡拝してまわった。

お住職さまもおられる、在家の方、高齢者も若者もおられる。照りつける真夏の陽射しの中、みな心を一つにして、法然さまのみ跡を辿られるその熱心な姿に、私はたいへん感動した。

私は岡本師に伺ってみた。「真宗の方は親鸞さま、親鸞さまで、法然さまのことはあま

りおっしゃらないのかと思っていました」

「いいえ、法然上人は親鸞聖人の先生ですから。梯先生にも法然上人のご研究がたくさんありますよ」

父が亡くなって二十年近くなるが、生前、私がいくら勧めても父はカトリックの洗礼を受けると言わなかった。その父が亡くなったあと、枕の下から薬の包み紙に和歌が二首記されたのが出てきた。亡くなる数日前に書いたものらしく、判読もやっとの震える文字で書かれた和歌の一つに、父はこう読んでいた。

なむあみだ仏　なむあみだ仏のお六字は
父にも母にも　縋り給える　六字にあらずや

「囲む会」の皆さまと共に法然さまのみ跡を巡拝しながら、私は、特に一人の高齢のおじいちゃまが、時によるめきがちに、それでも皆に付いて、法然さまのみ跡を慕い辿っていかれるお姿に言い知れぬ感動を覚えた。聞け

ば、このおじいちゃまは「囲む会」の事務局を預かっておられる岡本法治師の父上で、「家では田んぼを耕して」おられるという。

私の先祖も、こうして法然さま、親鸞さまのみ教えを、生きる杖とも柱ともして、苦しみ多い人生に慰めを得、浄土に希望を託して生きていったに違いなかった。

『和語灯録』が伝える法然さまのみ教えが思ひ出される。

「この世を生きていくのは、念仏が称えられるように生きていきなさい。念仏の妨げになるものは、何であれこれを嫌^{いと}い捨て、念仏だけを大切にするようにしなさい。

独身でいて念仏が称えられないならば、妻を娶って称えなさい。妻がいて邪魔になるようならば、結婚せず独身でいなさい。……」

ここには、いかなる宗教においても、宗教者である者にとっての核心が、平明な言葉で述べられている。大切なことは、鞭打ったり、わざと食事を不味くしたり、沈黙を守ったり、

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限会社

古島法衣店

〒114 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)38421289

振替0018002145231

等々の苦行をして、その苦行自体が目的化し、肝心の神や仏の姿を見失うことではないのだ。

そうではなくて、愚者の自覚を持って、己の無力、小ささの自覚を持って、慈しみと愛に満ちた神に、弥陀仏に、依り頼むことであろう。その愛のエレベーターに、み翼に、乗せて戴くことこそ、天国へ至る、そして浄土

へ至る、もっとも確実な道であろう。

かく生きて「小さなテレーズ」は二千年のカトリック教会史上、女性で三人目の「教会博士」となり、法然さまはそんなテレーズから七百年も前に、阿弥陀仏の本願他力のみ翼に乗って浄土へ直行する道を見出された、卓越した聖者であられた。

2005

10

表紙のことば

絵と文

村上健

魚屋さんの町

海辺の小さな町はいいですね。町中に潮の香りが漂い、トタン屋根の上で猫が徒党組んで昼寝してたりして。都会モンは歩いてるだけで気持ちや和んできます。

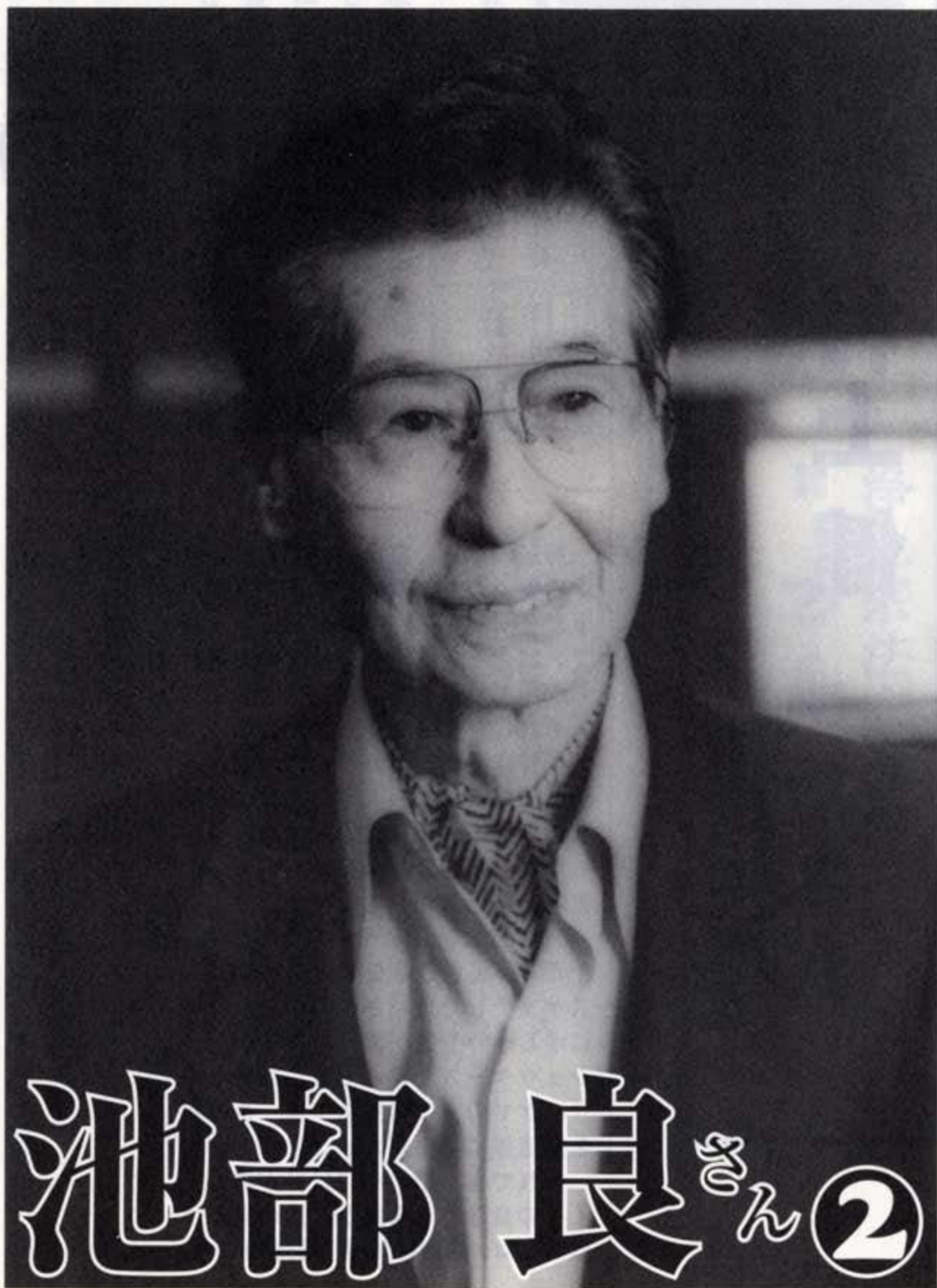
それに、都会で老人とすれ違っただけで特に感興は湧かないけれど、海辺の町だと、この人きつと昔は屈強な海の男で、随分女の人泣かしちゃったんだろうなあなんて、ちょっとまぶしく見えたりもします。

日本三大朝市とやらで知られる、千葉・勝浦もそんな所でありまして、スケッチした魚屋さんの店先には実にゆるーい空気が流れておりました。ショウケースと言っても、大きなポリバケツの上に発泡スチロールの箱を無造作に積んだだけ。

それでも、箱の中には目が黒くてイキの良さそうな魚が。店の見かけはレトロ、品物は新鮮。理想的です。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

昭和十九年二月、池部さんの属する師団に南方へ転進せよという命令がくだった。

「戦争では何度か死ぬような目に遭いましたが、これからがひどくなるんです。ぼくたちを乗せた輸送船四隻は上海の港を出て、二日後には朝鮮半島から来た船団と合流して南へ向ってました。さらに二日後の真夜中、その船団の何隻かが、米軍の潜水艦から魚雷攻撃を受けて、一瞬のうちに沈没するのを見たんです。真っ赤な彼岸花みたいな、陰気で花やかな炎を高く上げて轟沈こうちんするのを間近に見たときは鳥肌が立ちましたね。結局われわれも、ニューギニア近くのハルマヘラ島に向う途中で魚雷の直撃を受けて、全員武装のまま海に飛びこんだんですよ」

まるで碇いかだを高く揚げて壇ノ浦に入水した平知盛卿のようだ。

「とにかく軍刀とか双眼鏡とか手榴弾とか拳銃とか弾丸百二十発とか、重い物を身につけてますからね、水泳は得意なのに、どンドン

どンドン、どこまでも海底へ沈んで行くのはさすがに慌てました。それでもようやく浮かび上がって、昼の二時ごろから夜中まで約十時間も海に浮いていたら、運良く日本の軍艦に救助されて、ようよう赤道直下のハルマヘラにたどり着いたんです」

今度は「船乗りシンドバッドの冒険」だ。それにしてもそんな南海の小島で、どう戦うのだろう。

「ぼくらもそう思いましたよ。でもしばらくは平穏な日々が続いて、有難いなあと思っていたら、九月ごろのある日、敵機で空が真っ黒になって、地球壊滅かと思えるようなすさまじい爆撃です。全員ジャングルの奥へ逃げこんで、幸いぼくの隊六十名かは奇跡的に無事でした。しかし食糧もほとんど焼かれて、それから飢餓地獄ですよ。トカゲ、ヘビ、カエル、ワニ、ネズミも食べつくして、しまいいには海水で煮た雑草で露命をつないでいたんです」

会いたい人

人びと

5/15/16

5/15/16



立教大学時代、21歳の池部さん。左は弟さん、手前左が母簗子さん、右が伯母節さん。

池部良さん②

撮影/大木実子

翌年八月の終戦を知るのは、敵機が突然ま
ったく飛んでこなくなったから。

「ほかの隊の下士官たちが来て、陛下の詔勅
がくだって戦争は終った、と告げられたんで
す。いやあ、生きててよかった、みんな、日
本へ帰れる日までなんとしても生きていよう
な、って部下を励ましました」

復員船が来るのはそれから十か月後のこと
だそうだが、生命の危険にさらされなくなっ
ただけ、気持のほうは楽になった。

「そうなるとうとりが出てきて、各隊で芝居
をやるうという要望が何度も来たんです。そ
れでぼくが台本と演出を担当して、『右門捕
物帖』をね（笑）。劇中劇にお富与三郎を出
して、犯人はお富役の女方なんですよ。パラ
シユートの布で、ぼくの隊は衛生隊だったの
で、赤チンやヨーチンで染めて衣裳を作って、
かつらは椰子の実の皮を使って、針金で土台
を作って縫いつけてね。床屋さんだった兵隊
がていねいに作ってくれて、いいかつらがで

きた。人間で、いくらおなかがすいてても、
こういう娯楽を欲すものなんだということが
よくわかりました」

昭和二十一年六月、アメリカから貸し出さ
れた輸送船がようやく迎えに来て、復員兵千
数百名が乗船する。

「出港して四、五日たった晩に、闇の中から
ぬうつと顔を寄せて来た部下が、ほかの隊の
将校で日ごろの怨みから殴られたり海に放り
こまれたりされたのがいるそうです、隊長殿
は自分たちが守ります、って。八人ばかりで
円陣作って、真ん中に入れてくれたんです。
涙が出るほど感激しました」

これは陸奥へ落ちる義経を弁慶や四天王が
取り囲んで守る『勧進帳』の一場面。

「それから誰かが交渉してくれて、ぼくは無
電室へ匿かくまわれました。隊長としてはかなり頼
りなかったけど（笑）、いい人だからとか言
ったらしい。無電室長は出征前のぼくの映画

を三本とも観たと言つて、とても親切にしてくれました。台湾沖にさしかかるころ、日本のラジオが入るかも知れませんが、と言つて無電のスイッチを操作したら、明るい女の人
の声で『リンゴの唄』が流れてきました。ああ、世の中平和になったんだな、とつくづく実感しました」

上陸地は和歌山県の田辺港。バラック建ての復員局に一泊し、翌朝、窓口に積んであつた連絡ノートを何気なくめくつてみる。

「すると一番先に手に取つたノートに親父の名と疎開先が記されてました。茨城県猿島郡山田、とあつたので、東京駅から東北本線の古河駅まで行つて、ようやく両親の許に帰還しました。親父はもう髪の毛がほとんど無くて、おふくろも急に年取つた感じで、ああ、苦勞したんだな、と思いましたね。翌日、東宝の砧撮影所に超満員の列車で挨拶に行つて、でも知つた顔に会わないんですっかり氣落ちして山田に戻つたら、その晩から高熱を

出して、チブスで二か月間寝込みましたよ」

池部さんは再び銀幕に返り咲いて大スターへの道を歩き始めることになるのだが、その使者として訪れたのが、高峰秀子さんと市川崑（当時助監督）さん、というのがすごい。

「デコちゃんは昔、ヒヨロヒヨロのぼくに豆モヤシという渾名をつけた人ですからね（笑）。歳は向うが下だけど、映画界では大先輩です。このとき病み上りのぼくは、立てば白滝、座れば折紙みたいな（笑）、情けない状態だったけど、島崎藤村の『破戒』を映画化するのに当つて、阿部豊監督がぼくに主役の丑松役を演らせたい、というので、恋人のお志保役のデコちゃんが迎えに来てくれたんです。じゃあ身体がちゃんとしたら考える、なんて氣のない返事をしたんで、お前、もつてえねえことをするじゃねえか、つて親父に言われてね。で、またしばらくしたら秀子先輩と市川さんが、今度は支度金だと言つてコンサイスの辞書くらい部厚い茶封筒を持って

きた。座敷の奥から親父が大声で、今の世の中、買いたいってんだ、売らねえやつがあるもんか、って（笑）」

しかしこの『破戒』は、撮影四、五日目で組合の争議激化のため、製作中止となる。

間もなく決った次の作品は『四つの恋の物語』。オムニバス形式の第一話、「初恋」（豊田四郎監督）で、共演は久我美子だった。

「女学生役の美子ちゃんは十五、六歳。高校生役のぼくは二十八歳。純な少年少女の淡くて切ない初恋の物語でした」

この一本で池部さんの人気はたちまちブレイクする。前に中止された『破戒』は、その翌年、木下恵介監督により松竹で撮影されたが、東宝からは池部さんだけが行ったので、恋人のお志保役は桂木洋子だった。

昭和二十四年七月、石坂洋次郎の新聞小説『青い山脈』（今井正監督）が封切られ、空前の大ヒットとなった。映画館はどこも大入り

で、押し合いへし合いの立ち見が出た。

「あの高校生の六助役がぼくの代表演技とは決して言えないけど、でも大好きな役柄で、伸び伸びと演じられたのがよかったです。地方の小さな町の女学校を中心に、その町の封建的勢力を打ち破ろうとする事件を明るく描いて、面白かったですね。主役が誰なのかわからない、いわば青春群像の映画です。原節子さんが美人の先生、龍崎一郎さんが正義感の強い校医、ニューフェイス杉葉子君がぼくの恋人役新子、木暮実千代さんは色っぽい芸者梅太郎、若山セツ子さんが丸眼鏡のお茶目な女学生。みんなよかった。戦後四年しかたっていないのに、どこにも暗い戦争の影が微塵も感じられないのには、ちよつと不思議な気がしましたね」

池部さんが三十二歳にして高校生役をふられたについては、愉快な裏話がある。東宝が人気小説の映画化権を原作者に願ひ出たら、六助が池部良でなければ断固として許可しな

い、と石坂夫人が強硬に主張したのだそうだ。「そうなの（笑）。奥様が東北弁でこうおっしゃる。うちの人が弘前の女学校辞めて東京へ出てきて、大森で貧乏暮すをすてたとき、ご近所にすんばらしい絵描きさんがいて、そのめんこいお子さんが良ちゃん。そのイメ



「白夫人の妖恋」(昭和31年)で山口淑子さんと共演する

ーズが六助なんだから、六助は良ちゃんでなきやダンメだ（笑）って。それでプロデューサーの藤本真澄さんは、お前が引き立つように仲間の高校生には同年輩のを集めてやるから、伊豆肇なんかお前よりずっと臺^{とう}が立ってるから安心しろ、って」

ところで、池部さんは戦後日本映画の黄金時代を代表するほとんどの名女優と共演している。原節子、高峰三枝子、高峰秀子、久我美子、山本富士子、岸恵子……。

その中では誰方が一番好きでしたか？

「そういう質問にはお答えできません（笑）。でも強いて挙げればですね、李香蘭だったころから憧れの人だった山口淑子さんですね。『暁の脱走』（谷口千吉監督）で共演が決ったときはドキドキしました。恋心さえ抱いていた李香蘭さんに初めて顔を合わせたら、思ったよりずっと背が小さかったけど、黒い瞳には張りがあつて、赤い唇が花びらのようで、やつぱりきれいでした」

この映画を私は最近DVDで観たが、ちょっとクーパーとデートリッヒの『モロッコ』を思わせるところがあつた。戦地に慰問に来ている美人の踊り子が、しつこく言い寄る上官（小沢栄太郎）を振って、美男の三上上等兵と命がけで脱走する、というもの。たとえ

ば池部さんが汚れた兵隊服で営倉の中に背筋を伸してただいるだけ、というシーンにしても、その容姿の端正な美しさには感嘆させられた。これなら部厚い茶封筒の支度金が出るはずだ。

「山口さんてね、案外ズバズバ物を言う人ですよ。ぼくがまだ前の映画が撮り切れてなくて、髪の毛を兵隊刈りにしてなかったら谷口監督が、李さん、こいつは演る気がねえらしいから、ほかのやつに当たろうか、ってわざと言った。そしたら、でもこんなに頼りない顔と身体つきを持ってる人って、ほかにいる？ 春美（踊り子）が心から同情しちゃうような人が……って（笑）。当人を前にして、頼りないはないだろう、と思ったけど、そこは憧れの人のことだから、につこり笑ってお辞儀をしました」

山口淑子さんの「頼りない」は、もちろん「上品、ハンサム、素敵」の意味。

（つづく）

転がり落ちた鉛筆を拾おうとして下を見たら、ゴマ粒ほどの小さな蟻が畳みの上を走り回っている。

甘いものなど置いてないのに、この暑さに蟻も勘が鈍ったのだろうと哀れに思い、潰せばたやすいがそのまま外に出そうとしたところ、そのすばやい動きに手が鈍り漸くちり紙に包んで窓下にはなすことができた。

それにしても、密室の書斎へ何処から入って来たのか、何のために、しかもたった一匹(?)で。

教えて貰えるものなら聞いてみたくなつたが、ゴマ粒蟻ん子に敬意を払わずにはいられなかった。そして潰さずに放してあげてよかったと思った。

翌日、書斎の隅の屑籠を動かして驚い

た。そこに数十匹の蟻が群がっている。甘い物などはカケラもないのに。

しかし良く調べたら喉飴の包み紙が入っていた、それも飴が付着しているとは思えない小さな紙が。

あの蟻ん子は斥候せっこうだったのか。

思いは次々に広がっていった。

軍隊で斥候の役を命じられたが、演習なのに恐怖にかられた思い出がある。

勇敢な蟻ん子よ、どの様にして仲間語りかけ連れて来たんだ、密室の書斎へ何処から誘導したんだ。たった一枚の包み紙の僅かな甘味を求めて。

私は自然の大きな「いのち」の力を感じ、その力を頂き逞しく賢く生きる蟻ん子たちに頭を下げ、「一緒に頑張ろうね、万歳」と叫びたくなった。

第五回梅窓院文化講演会

平成17年 **10月29日** (土)

午後3時開場 午後3時半開演

東京・青山 **梅窓院** 祖師堂

(東京メトロ銀座線「外苑前」駅出口1a 徒歩1分)

法然上人を語る

浄土宗宗務総長 **水谷幸正**

残したい日本語

俳人 **黛まどか**

入場無料

問い合わせ

梅窓院／青山文化村

107-0062 東京都港区青山2-26-38

電話 03-3404-8447

ファックス 03-3404-8107

地体は生きとし生けるものは過去ちちははの父母そろうにて候なれば、
食うべき事にては候そろうわず。

【往生浄土用心】

日ごろ私たちが食している、生きとし生けるものは、
自身の前世ぜんせにおける父や母の生まれ変わりかもしれないのですから、
本来は食べるべきではありません。

矛盾のはざままで

前回（本誌六月号）、ある短大が行った調査結果、「近年、小学生で夕陽を見たことのない子や、田んぼを流れる小川など、自然の中で釣りをしたことのない子の増加が顕著」とのニュース報道を聞いた旨を記した。

二〇〇一年から四年にかけて国立天文台が実施したアンケートでは、公立小九校七二〇人に「太陽の沈む方角は？」と問うたところ、「西」と答えたのは七三％にとどまったという。専門家はこれを「夕陽が沈むのを見るような自然体験が子も親も失われている。情報があふれる一方、テレビやゲームなどに時間を奪われ、身近な現象を学ぶ機会が減っている」と分析しているという。

この二つの結果に挑むつもりではないが、昨年あたりから、小学二年生の娘と幼稚園年長の息子と、近くの田んぼの用水路へ釣りに行くようになった。幸いなことに、自宅付近も宅地化が進んできているとはいえ、幅わずか二メートル、水深一・五メートルほどの用水路ではコイやマブナ、ヘラブナ、モロコ、ヤマベ、ドジョウなど川を代表する魚たちにまだ出会うことができる。時には二五センチを超えるカマツカや、大きな口でいかつい顔つきのハスといった珍客ともお目にかかれるし、初夏には大量に群れているメダカも簡単にすくえる。川面に浮ぶ小さなウキを見つめていると、釣りは男の子のあたりまえの遊び

として興じていた小さい頃の自分にタイムスリップしたようで感慨深い。魚がかかって満月のように絞り込まれる軟調の竿にどうしていいのかわからず、声を張り上げている子らの表情も微笑ましい。このとき、一番楽しんでいるのは、ほかでもない親本人かもしれないが……。釣った獲物はリリースしているが、何匹かは、我々家族の仲間として居間の窓辺に置かれた狭い水槽でがまんしてもらっている。

と、ここまででは親と子のほのぼのとした休日の光景なのだが、仏教的には間違いなく否定される行為だ。「釣った魚はリリースしている」と反論しても、活き餌は使わない釣りにしろ、魚に対しての偽り行為は免れない。リリースした魚が必ず生きて生けるという保証もない。まして、夕餉ゆうけの食卓にのせでもすれば、ダマシて捕えたものの命を奪うという、重罪に値する。仏教のもののさしで言えば、悪質な「遊び」ではある。

しかし、我々は、自分以外の生物の命を奪うことによつてのみ自らの命を保つことができる、という命題の中に生きている。どうあがいても、これは覆せない。また、人間も他の生物も、同じ命である以上、その価値を安易に判ずることはできないし、奪うことなど許されない。でも食べなければ生け

ていけない、奪ってしまおう——。永遠に解決不能の大いなる矛盾である。

クワガタは大切に飼うくせに、ゴキブリは叩き潰すを是とする。クマに食べられるサケの場面をテレビで見、可愛そうともらしつつイクラ丼に舌鼓を打つ……。世の中には、こうした矛盾はいくらでもあり、そのはざまのなかでしか生きていかざるを得ない現実がある。これは一体なんなのだろう——。子どもたちには、このことにいつか気づいてくれれば、とひそかに思っている。

子どもに頭ごなしに「殺生はいけません」と言っただけをやめさせることは可能かもしれないが、論者が根本的に生き方を変えなければ（生きる術が絶たれるかもしれない……）それは詭弁と評されかねない。釣りは遊びだからやめられても、天のご機嫌をうかがいつつ、命を張って漁業に従事する方々に何をか言わんや。深謝の念しか出てこようはずがないではないか。

黄昏の川に糸を垂らしながら、実はとても大事なことを教わってきたのか
もしれない。

（小村正孝）

日本酒のことば の日本酒 じかん その十 「五味」 「山女酒」

先日、私事で中国・杭州を訪ねてきました。上海のすぐ南に位置するこの街は、権力闘争を嫌い、晩年はただただ詩と酒と琴を三友として過ごした唐代の詩人・白楽天（白居易）にも詠われた絶景の湖・西湖で名高い中国の六大古都のひとつ。しかし、残念ながらスケジュールの都合で、ことに夕陽の頃が美しいとされる“西湖十景”は、移動のタクシーの中からちらりと眺められただけでした。お酒もしかり。白楽天にならい、とろりと舌がとろけそうな年代ものの紹興酒（紹興酒はお米を醸造して作るという点で日本酒と共通しています）をぜひ！と願っていたのですが、かろうじて入手でき

たのは、滞在ホテル近くのコンビニにあった地元産のビールのみでした。

とはいえ、やはり、捨てる神あれば拾う神あり（ちよつとたとえが変ですね）。帰国の翌日、ご近所の呑み助仲間たちのご好意で、珍しい「山女酒」を味わう機会に恵まれたのでした。山女とは、ご存知の通り、溪流の冷水域、まさに最上流の清流にしか棲まない魚です。しかもその日の山女は、呑み助仲間の幼馴染みの山女釣り名人が、大分の深山の清流に分け入って釣り上げた正真正銘の天然もの。つやつやと光る淡褐色の、見事な流線型の体は、まさに「山女」の字の如し。見るからに麗しいものでした。そんな山女

藤原理加



を、少し多めの塩をして焦げ目がつくまで焼き、どんぶりに入れ、あらかじめ熱燗にしておいた酒(55度くらい)をたっぶり全身がかぶるまで注ぎ、さらにサラップで蓋をして、二十秒。これが、山女釣り名人直伝の「これはねー、もうひれ酒なんか比べ物にならないぐらい旨いんだよー」という山女酒の作り方なのでした。しかも、この日熱燗に使ったのは、いつもの居酒屋四谷のYのご主人も惚れ込む名手、佐久の花の純米吟醸(長野県・佐久の花酒造株式会社)。まったく臭みのない、天然ものの山女から滲み出た、上品かつ深山の清流の香気も備えた繊細な旨味。それが、五味のバランスも抜群

の爽やかな名酒に溶け込んで……。そんな山女酒はおそらく、日本全国、どんな一流料亭でも味わえない贅沢なもの。というのも、これはまさに天と人の恵みが融合した他にはないものだったからです。そして、その清冽で豊かな味わいは、美しい日本の風土への感謝の思いも呼び起こしてくれたのでした。というわけで、美味にも美酒にも、いろいろあるのだからと考えていて、ふと「日本酒の五味」を改めて確認したくなりました。ものの本を引いてみると、それは「甘・辛・酸・渋・苦」。ちなみに佐久の花のモットーは、この五味を備え、なおかつ喉ごしよく爽やかな酒だとか。改めて納得でした。

乱歩地獄

監督 竹内スグル、実相寺昭雄、佐藤寿保、カネコアツシ

11月5日(土)シネセゾン渋谷、テアトル新宿ほか
全国順次ロードショー



©2005「乱歩地獄」製作委員会

むかしヘミングウェイにハマっていた頃、ジョン・スタージェス監督の『老人と海』のファースト・シーンが「ヒー・ウオズ・アン・オールド・マン・フリー・フィッシュ・ト・アローン……」と淡々と続くハード・ボイルド・スタイルの朗読と共に展開するのに、背筋がゾクゾクする程の昂奮を覚えた記憶がある。

いっぽう『乱歩地獄』のオープニングは数分に亘ってサイレントである。原作に「おそらく音も、匂いも、触覚さえもが私のからだから蒸発してしまつて、練羊羹のこまやかに澱んだ色彩ばかりが、私のまわりを包んでいた。……聴覚のない薄闇の世界……空はこの世のものならぬいぶし銀、森は黒ずんだ緑と茶、そして水は、それらの短調な色どりを映しているにすぎない」と描写される光景そのものが、アイスランド・ロケによって映像化されたからには、観客の耳から音を蒸発させねばならぬ。水鏡の表面では、左右が、そして対岸の事物は上下も逆転する。しかして乱歩の世界では性別も逆転するとおぼしく、浅野忠信の裸身はこの女体に変換され、そのモノクロに近い柔肌に食い込む爪が、縦横に掻き立てる蚯蚓腫れに、滲み出る赤い血の網目を『火星の運河』に

見立てるところで、オムニバス映画『乱歩地獄』第一話が完結し、同時にこの地獄を荘厳する、双璧の一つ、蚯蚓腫れのイメージが観客の網膜に焼付けられる。

双璧の片割れは、もちろん鏡である。第一話では自然界の賜物「水鏡」として地獄を荘厳した鏡が、第二話『鏡地獄』では、人間の妄執を籠めて研ぎ上げられた「影取りの鏡」として魔力を揮う。かの安倍晴明による『金鵄玉兔集』に指南を仰ぎ、美少年・齊透（成宮寛貴）が精魂込めて鑄造研磨した、この魔鏡に面影を奪い取られる、いずれも湘南住いの美女たちは「ザクロのような」顔をさらしてことされる。同じころ鎌倉の古刹「某寺」では深夜、防犯ベルが突如鳴り出し、近くの「江ノ電」踏切の信号機も誤作動を起こすアクシデントが続き、駆けつけた明智小五郎（浅野忠信）が、堂内秘仏の胎内納品たる古鏡もまた「影取り」であり、サラジウム処理を施された鏡面が発散する強いマイクロ波による共振作用こそ、人面破壊、ベル誤作動の真因であると謎解きするに及んで、齊透の鏡工房に殺到する一同を待ちうけていたのは、齊透自身と、彼の鏤骨の労作「鏡地獄」との壊滅の光景で、これが第二話のラスト・シーンとなる。

ここで少々脱線したい。原作には「鏡地獄」の設計の概略と、完成に至るまでの試行錯誤が詳述されているが、その一段階に酷似した教説が想起されるからだ。ほかでもない。『碧巖録』八十九則「鏡灯の論」である。唐の時代が七世紀が八世紀に変わるころ、則天武后のために賢首国師法蔵は部屋の四面、四隅、上下に一枚ずつの鏡を置き、中央に一つ灯明を設けた。「若し東鏡を看れば、則ち九鏡の鏡灯、歴然として齊しく現ず・若し南鏡を看んも、則ち鏡鏡如然たり」とある。つまり十の鏡の一つ一つが、他の九鏡を包摂しているのであって、これを仏・菩薩・声聞・独覺・天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄の境界が、それぞれ他を具有していると説く「十界互具」の教説に配当すれば、我々は「人界」に生をうけているが、他の九種の存在を「包摂」し、その中に勿論「地獄」も含まれているからこそ『乱歩地獄』の登場人物に対する、不可解な「感情移入」が成立するのだ。さらにいうならば、普通「地獄」における自分自身を想定する場合「被害者」の立場にのみ身を置きがちであるが、これが迷妄であることに覚醒させ、「加害者」の立場、つまり赤鬼・青鬼・牛頭・馬頭の立場に身を置き、己が内に潜む「加害者」

の存在を強く自覚させるのが、蚯蚓腫れの美を、否定しきれない自分自身ではないか。

ここまで自己を凝視するならば、第三話「芋虫」において、「我が陸軍の誇り」と讃えられつつも「両手両足は、ほとんど根元から切断され、わずかにふくれ上った肉塊となつて、その痕跡を留めているにすぎないし、その全身にも顔面をはじめとして大小無数の傷あとが光っている」傷痍軍人・須永中尉（大森南朋）と、貞淑なる妻（岡元夕紀子）の間に開陳されるSMの場面にも、さらにその地獄絵図を覗見する平井太郎（松田龍平）の眼差しにも、妄想の世界で共感を体験することになるう。

『今昔物語』第十九巻、大江定基の故事と『九相詩絵巻』とを現代に移し、女優木下芙蓉（緒川たまき）に対する、お抱え運転手榎木愛造（浅野忠信）の異常なる純愛物語に仕立てた感のある第四話「蟲」については、たとえば「そこには、もはやきのうまでの美しい恋人の姿はなくて、女角力おんなすもうのような白い巨人が横たわっていた。からだかゴム鞠まりのようにふくれたために、お化粧の胡粉が相馬焼みたいに、無数の亀裂を生じ、その網目のあいだから褐色の肌が気味わるく覗き、顔も巨大な赤ん坊のようにあど

けなくふくれ上っていた」という原作の文章が、一語一句正確に映像化されているにもかかわらず、文章のほうにはるかにリアルな迫力が感じられることを指摘しておきたい。たぶん筆者の場合、妄想は具体的な映像より、抽象的な言葉によって喚起されるほうが、より奔放に飛翔できるから、であろう。

例によって蛇足を二本。

その一、江戸川乱歩は処女作『二銭銅貨』の、六字の名号を暗号のネタに使うという卓抜したアイデアによって、日本推理小説の先駆者となった。

その二、前記『今昔物語』は大江定基について、愛人の死後も「悲しびの心に堪へずして、久しく葬送することなくして、抱き臥しけるを、日來を経るに口を吸ひけるに……」と究極のエロティシズムともいうべきエピソードを伝えているが、元祖さまの「かばねに執するまどひ」というお言葉は、これとは無関係なのだろうか？

（長野・十念寺住職）

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 剣

〔特選〕 剣玉の世界一周天高し

片桐てい女

剣玉ははやりすたりを経ながら、根強い人氣を得ている。世界一周というのはどうするのかよく分からないが、手を中心にくるっと回すのだろうか。世界一周を持ちだした時に句は決まったようだ。

〔佳作〕

薫風や少年剣士の太き眉

河合富美枝

巫女の舞う剣先眩し夏祭り

石原 新

剣山に活けてカンナの燃え立ちぬ

谷 しげ子

● 号

〔特選〕 号砲に真帆あでやかにヨットゆく 石原 新

ヨットレースである。群れていたヨットが号砲と同時に動きだす。真帆というから、どの艇も順風を帆の全面に受けているのがよく

分かる。よいレースが期待できる。「ゆく」
にやや弱さがあるように思う。

〔佳作〕秋の決号令待ちの昆布船

中島富士子

信号は寂しいランプ葛の花

山口振り子

平成の年号にも馴れ終戦忌

佐藤 雅子

●自由題

〔特選〕測量の杭の一打に草いきれ

浜口 佳春

土地開発のためだろうか。草原の測量が始まる。計器を据え杭を打つ。日はすでにじりじりと射し、草いきれが足元から這い上がって身を包む。「一打に」が、そのむつとする熱気を更に強める。

〔佳作〕打ち水をして月島のなまぐさし

狭山 棹

御神酒所は老体ばかり口ばかり

吉川 幸夫

風鈴の躍起となっている夜半

池田 伊吹



参加作品

編集部選

剣

光悦の剣一振や秋澄めり	周東澄江
剣菱を夫に供えら初彼岸	金谷友江
遠雷や剣のごとく刻み落つ	大場 清
新月に影をおきたる剣の舞	佐藤雅子
衛兵の剣先に月上りけり	中島富士子
剣持ち露払い役猿田彦	中島一子
豆剣士汗の量だけ上手なり	浜口佳春
山登り青天を突く剣岳	井村善也
剣客の顔でいかなご煮てをりぬ	西原規夫

号

秋暑し号外に沸く八重洲口	周東澄江
号多き秋の作品刻字展	金谷友江
幼児の屋号名乗りて踊りけり	伊藤寿美子
蟬の声号令かけたる様に鳴く	山口信子
あ、あわれ極暑の葬に号泣す	増田信子
号令で授業はじまる百日草	片桐てい女

自由題

人気なき夜のクーラー音の花圃	山本美代子
非情また情や甘藷のつるがへし	片桐てい女
盆迎え胸の奥には母在はす	中島富士子
紅の花盛りて母屋は老夫婦	佐藤雅子
秋立ちて花いつばいで夫送る	金谷友江
わだつみの声たいらかに霊迎え	河合富美枝
蓮の葉の露まろびては太りけり	周東澄江
位牌拭くことより始め盆支度	寺下忠至
すうすうと昼寝の漁師浜の風	井村善也

浄土誌上句会のお知らせ

題

①季語ではありません

村穴自由題

締切・二〇〇五年十月二十日
 発表・『浄土』二〇〇五年十二月号
 選者・増田河郎子（『南風』主宰）
 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
 ●特選各1名・佳作各3名
 ●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんねえ

24 かい目

かまち♡おとう



編集後記

盃に映りし月を飲みこめり 岱潤

「暑さ寒さも彼岸まで」などによく言われるが、今年はその彼岸が来ても暑さが終わらない。真夏に三十一度と聴いてもすんなり受け止められたものが、九月の終わりではさすがにうんざりしてしまふ。そんな時妻の友人がこんな話をしてくれた。

「昨日子供の友達、小学校四年の女の子が遊びに来ていきなり、『まったくクソ暑くて、人でも殺したくなったわね』って言ったのよ、この言葉は聞き捨てに出来ないと思って、『ちよつと待って』と言つて、ピシバシ怒鳴りつけちゃったわ」子供同士の言葉が乱暴になったのは、今に始まったことではない、また女の子

の言葉が男性言葉になったのは、今や子供に限ったことではない。しかし冗談でも言つていいことと悪いことがあることは、現代でも変わりないはずだ。この子供の言葉は、明らかにそれを逸脱している。私たちの国は元来言葉には不思議な霊力が宿っている『言霊』——ことだま——として、美しい言葉を使うことに、ことのほか神経を使つてきた。言霊の幸ふ国という言い方すらある。つまり発せられた言葉が力を持つことを信じてきた。非日常的なことも言葉にしていると、日常化してしまう。だから日頃から美しい言葉を常に発しているべきなのだ。最も美しい言葉、それはお念仏である。(長)

雑誌「浄土」
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十一巻十月号頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十七年九月二十日

発行

平成十七年十月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三(三五七八)六九四七

FAX

〇三(三五七八)七〇三六

振替

〇〇一八〇・八・八二八七



平成17年1月号



平成17年2、3合併号



平成17年4月号



平成17年5月号



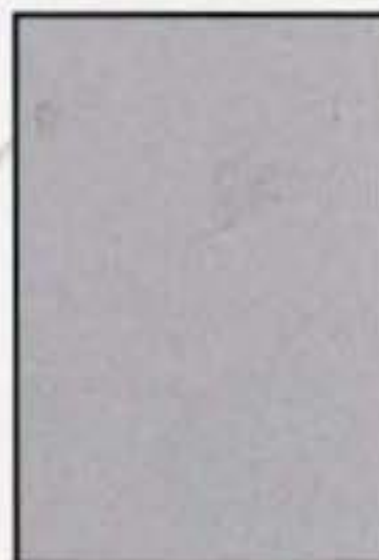
平成17年6月号



平成17年7、8合併号



平成17年9月号



法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円

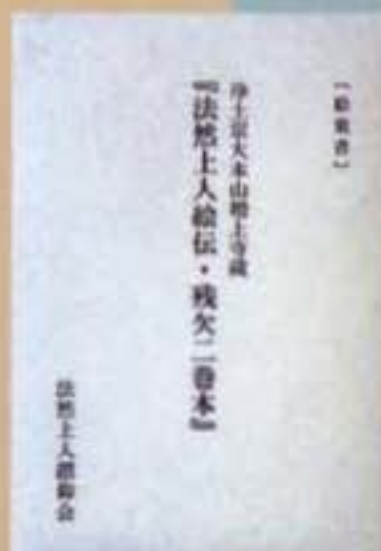


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036